慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	オズボーン判決(1909年)(I) : イギリス労働史におけるリベラリズムとソーシャリズム
Sub Title	The Osborne case of 1909 (I)
Author	松村, 高夫
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1993
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.86, No.2 (1993. 7) ,p.151(11)- 168(28)
JaLC DOI	10.14991/001.19930701-0011
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19930701-0011

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「三田学会雑誌」86巻2号（1993年7月）

オズボーン判決（1909年）（I）

——イギリス労働史におけるリベラリズムとソーシャリズム——

松　村　高　夫

I．はじめに——オズボーン判決とは何か——

オズボーン判決とは，自由党（Liberal Party）の支持者W.V.オズボーン（Walter Victor Osborne）が，労働組合が労働党（Labour Party）に組合基金から資金を提供するのは違法であるとして合同鉄道従業員組合（Amalgamated Society of Railwaymen—以下，A.S.R.S.と略す）を訴え，1909年12月，上院がオズボーンを勝訴とした判決である。この判決は，タフ・ヴェイル判決（1901年）とならんで，20世紀初頭のイギリス労働運動にたいする弾圧判決としてよく知られている。両判決ともA.S.R.S.にかかわるものであるが，上院で下された最終判決は，ともにイギリス労働組合や労働党を危機に陥いれるものとして，当時，A.S.R.S.という個別労働組合をこえて全国的に影響力をもった判決である。

労働代表委員会（Labour Representation Committee ——以下，L.R.C.と略す。1906年に労働党と改称）が設立されたのは，1900年である。イギリスの労働者階級は，この時はじめて自らの政党をもったのであるが，同時にこのことは，それまで労働者階級の利害を代弁していた自由党（左派）とのあいだに一定の対立と抗争をひきおこした。個別労働組合のレヴェルでいえば，内部に自由党支持者とL.R.C.支持者とのあいだの対立・抗争が生じたのである。1903年にはL.R.C.は「議会代表基金」を設け，選出された議員に給与（および，選挙費用の一部）を支払うことを決定するが，この決定が，自由党支持の労働組合員たちの反発をよびおこしたのはいわば必然的であった。以後，数年間，労働組合による政党への寄金が合法性をもつか否かをめぐって，延々と対立・抗争がつづき，その象徴的事件として1909年にオズボーン判決がだされたのである。

労働組合が政党に寄金を支出することを違法とし，より一般的には政治活動に支出することを違法としたオズボーン判決は，ただちに労働党に打撃をあたえた。というのは，労働党は収入の90%以上を労働組合による寄金に依存していたからである。また労働組合にたいしても判決は深

刻な影響をあたえた。それは1876年労働組合法の16条にもとづいて，労働組合は労使関係にかかわる活動だけを合法的であるとし，組合活動を狭く解釈して政治活動を排除するものだったからである。だが，1910年夏までに，いくつかの労働組合でも同様の訴訟と判決がなされると，オズボーン判決にたいする反対の気運は全国的にたかまった。同年9月のT.U.C.大会は，判決にたいする反対運動を展開する方針を決め，10月には大衆集会がもたれ，判決廃止が政治問題の焦点のひとつにさえなった。自由党政府は，1906年の総選挙で労働党とのあいだの統一候補戦術によって勝利し政権につくことができたという経過から，労働党に何らかの譲歩をせざるをえないという事情もあって，1910年11月には二つのことを約束した。すなわち，国会議員には公費を支給すること，および，労働組合の政治活動を回復することである。議員への公費支給は，翌11年8月に法案が通り実現した。しかし労働組合の政治活動の回復は，1913年3月の労働組合法（Trade Union Bill）が成立するまでひき延ばされた。1913年法は，二つの条件，すなわち，1）労働組合の基金を共済基金と政治基金に明確に区分し，政党への寄金は政治基金のなかから支払うこと，2）政党へのかような寄金は各組合員の投票にかけ過半数を得なければならないことを規定した。こうしてオズボーン判決は廃止されたが，政党への寄金については厳しい制限がつけられることになった。

以上がオズボーン判決とその廃止に至る経過の概要であるが，この判決をめぐってイギリス労働史学界ではすでにいくつかの点をめぐって論争がある。第一点は，W.V.オズボーンを支援した社会的集団は，ブルジョアジーであったのか，それとも労働者階級であったのか，という点にかかわっている。ウェッブ夫妻がオズボーンが最後までその訴訟を遂行できたのは，「豊富に資本家から資金援助された（liberally financed from capitalist sources）」とみなしたのにたいし，H.ペリングは，オズボーンがたんに「富裕な人々の手先（a catspaw for people of wealth)」だったのだろうかと，ウェッブ説に疑問を提起した[(1)]。労働組合員のなかにリベラリズムは広く支持を得ていた，というのである。

第二点は，1910年の総選挙のさいの労働党の戦術にかんするものである。G.D.H.コールが，オズボーン判決の結果，1910年の総選挙で労働党が財政的危機に陥り，候補者を制限せざるをえなかったと主張したのにたいし，ペリングは，それは事実ではないという。すなわち，判決は1910年の2回の選挙で労働党に打撃をあたえはしなかった，労働党は候補者数を減らして自由党

注（1） S. & B. Webb, *The History of Trade Unionism,* 1920 ed., p.608. Henry Pelling, 'The Politics of the Osborne Judgment', in *Historical Journal,* 25, 4, 1982, pp.890. 894. ウェッブは当時，オズボーン判決が労働組合史にあたえる影響を「オズボーン革命」と命名するほど重視した。S. Webb, 'The Osborne Revolution', in *English Review,* January 1911.

（2） G.D.H. Cole, *A Short History of the British Working-Class Movement 1789-1947,* 1966, p.313. Pelling, *ibid.*, p.908.

との統一候補戦術をとったのである，と主張したのである。[2]

第三点は，1913年の労働組合法の性格にかんしてである。ウェッブ夫妻が，オズボーン判決は13年法により無効になったとするのにたいし，ペリングは反対に，13年法は労働党を麻痺状態にするよう意図されたものであるとする。ペリングは，「法が通過したのち，労働党はオズボーン判決を覆す真剣な努力をしなかった」と主張する。[3]

このようなイギリス労働史学上の諸論点は，未解決のまま今日にいたっている。こうした点を明らかにするためには，オズボーン判決をめぐる全国的レヴェルでの推移だけでなく，A. S. R. S. という個別労働組合のレヴェルでその内部の対立・抗争を社会史的に分析する必要があるだろう。本稿の目的もそこにおかれる。資料は，主としてウォーリック大学モダン・レコード・センターにA.S.R.S.より寄託されている「オズボーン判決コレクション」[4]を使用する。オズボーン判決にかんしてはこれまでオールコックやバグウェルなどの先駆的研究があるが，そのうちで最も包括的で優れたものは，Michael J. Klarman, The Osborne Judgment/Historical Analysis, D. Phil. thesis, 1987, Oxford. である。

注（3） Webb, *The History of Trade Unionism, op.cit.*, pp.631-34. Peling, *ibid.*, p.908.

（4） このオズボーン判決コレクション（MSS. 127/AS/OC）の目録は，*The Osborne Case Papers & Records of the Amalgamated Society of Railway Servants,* compiled by Christine Woodland, edited by Richard Storey (University of Warwick Library, Occasional Publications No.4), Coventry, 1979. として刊行されている。当コレクションは，Minutes (Walthamstow Branch), Correspondence (1208通), A.S.R.S. Publications, Legal papers, Railwaymen's Parliamentary Representation Association, Press-cuttings 等から成っている。当資料の利用にかんしては，アーキヴィスト Ricahrd Storey 氏に深く感謝したい。

（5） M.J.Klarman の博士論文の複写にかんしては，当時オクスフォード大学留学中の北村行伸氏のおせわになった。博士論文の一部は，M.J.Klarman, 'Osborne : a judgment gone too far?', in *English Historical Review,* January 1988.として発表されている。

他にオズボーン判決についての2次文献としては，G.W. Alcock, *Fifty Years of Railway Trade Unionism,* 1922, chapter 18 ; William B. Gwyn, *Democracy and the Cost of Politics in Britain,* 1962, chapter 7 ; Philip S. Bagwell, *The Railwaymen : The History of the National Union of Railwaymen,* vol.1, 1963, chapter 9 ; Henry Pelling, 'The Politics of the Osborne Judgment', in *Historical Journal,* 25, 1982 ; K.D. Brown, Trade Unions and the Law, in C. Wrigley Ed., *A History of British Industrial Relations 1875-1914,* 1982 ; K.D. Ewing, *Trade Unions, The Labour Party and the Law : A Study of the Trade Union Act 1913,* 1982 ; Do., 'Trade Union Political Funds : The 1913 Act Revised', in *Industrial Law Journal,* 13, 1984 ; Chris Wrigley, Labour and the Trade Unions, in K.D. Brown ed., *The First Labour Party 1904-1914,* 1985.は欠かせない。

（6） Bagwell, *op. cit.*, p.241.

II. 訴訟の発端── R. ベル問題と「議会基金」の徴収

1 W.A.オズボーンとは誰か

W.A.オズボーンは，1890年，グレイト・イースタン鉄道にポーターとして雇用された。かれは，一般鉄道労働者組合（General Railway Workers Union ── G.R.W.U.）の組合員であった。[6] その組合は，ジョン・バーンズ（John Burns）とフェビアン社会主義者により組織された組合である。組合創設者たちは，「合同鉄道従業員組合A.S.R.S.を罵倒し，自らを真の闘争者と称賛し，A.S.R.S.は共済組合にすぎず，労働組合の目的にとっては何ら価値がない[7]」と考えていた。オズボーンは，また，ハインドマン（H. M. Hyndman）率いるところの戦闘的マルクス主義団体である社会民主連盟（Social Democratic Federation ── S.D.F.）の会員でもあった。[8]『鉄道労働組合の50年』の著者オールコック（G.W.Alcock）は，オズボーンに一般鉄道労働組合の会合ではじめて会い，数年間かれと同じ駅で働き，しかもオズボーンは結婚するまでオールコックの家に下宿していたので，かれの性格をよく知っていた。オズボーンの性格について，オールコックは「当時，若い精力的な社会主義者で，S.D.F.のメンバーであり，G.R.W.U.の組合員でもあった。かれの抱く原則に忠実に，かれはグレイト・イースタン鉄道における超過労働を拒否するといった[9]」と書いている。オールコックの評価はかれに好意的である。「その男を知っているものとして，わたしはこの件（オズボーン判決）のかれの行動に不賛成だけれども，かれがひん曲がった性格をしているというような中傷からはわたしは常にかれを擁護した。わたしはかれが誠実で実直な性格の人であることを知っていたし，かれの見解と行動は残念ではあるけれども，かれの道徳的性格は擁護する[10]。」

このような戦闘的な社会主義者であったオズボーンは，いつ頃反社会主義の行動をとるようになったのだろうか。ペリングはかれが1880年代末か90年代初めにS.D.F.を離れ，社会主義者ではなくなったとしている[11]。オズボーンがA.S.R.S.の組合員になったのは1892年であったこと[12]，

注（7） Alcock, *op.cit.*, p.236.
（8） Bagwell, *op. cit.*, p.241.
（9）（10） Alcock, *op. cit.*, pp.226, 240.
（11） Pelling, *op. cit.*, pp.890-91.
（12） MSS. 127/AS/OC/3/4/129.
（13） A.S.R.S. Walthamstow branch, MS minute book, September 30 1897. (MSS. 127/AS/OC/1/1/1) このウォルサムストウ支部議事録は，1910年10月に当支部がA.S.R.S.本部によって閉鎖されたのち（この閉鎖自体はオズボーン判決に関わるもので極めて重要であり，後述する），本部に送付され，それ以降本部が保存してきたものであるが，1897年9月30日から1905年1月12日までの分しか残存していない。それ以降の分は，支部あるいは本部が，当時，意図的に破棄したのかもしれない。

また，1897年にA.S.R.S.のウォルサムストウ支部が設立されるやいなや，支部の書記になったことは確認されるが[13]，自由主義者への転身の時期や理由はかならずしも明らかではない[14]。

2 R. ベル問題

L.R.C.が1900年2月に設立されたとき，A.S.R.S.はそこに加盟した最初の組合のひとつであった。A.S.R.S.はすでに数年前から組合代表を議会に送り込むことを計画していた。1892年のA.S.R.S.の年次大会では，鉄道労働者の代表として総書記のエドワード・ハーフォード（Edward Harford）を議会に選出することを決定している。もっとも，この決定はかれが自由主義者であったこともあって可決されたが，5票という小差であった。1895年の選挙でハーフォードはノーザンプトンから立候補し惜敗するが，A.S.R.S.の多くの支部はかれの自由主義に反対であった。1898年の年次大会では，政党にかかわりなく独立にA.S.R.S.の代表を議会に選出することが決定され，新しく，A.S.R.S.総書記になったリチャード・ベル（Richard Bell）が，つぎの総選挙では候補者になることになった[15]。こうして1900年10月の選挙で，予定どおりベルがダービー選挙区から立候補したとき，その選挙費用はすべてA.S.R.S.が負担した。ベルは当選した。しかし，ベルはリブ・ラブ派として行動したので社会主義者との対立をひきおこした。当然，L.R.C.のなかでのベルの立場は微妙であった。かれはL.R.C.の議長を1902-3年につとめるが，にもかかわらず議会では自由主義者として行動し，ダービーでの補欠選挙では自由党候補者を支持した。そのため1903年のL.R.C.の大会は，このような事態の再発防止のために規約を改正し，L.R.C.選出の議員は自由党や保守党の利益になるような行動をしてはならないとした。ベルは，ついにL.R.C.の執行委員を辞め，規約改正に署名するのを拒否した。A.S.R.S.の総書記はつづけたが，議会でリブ・ラブ派として行動したので，以後，絶えず社会主義者とのあいだに対立をひきおこすことになった。

重要なのは，これにたいするオズボーンの態度である。オズボーンにとっては，この規約改正

注（14） バグウェルは，1900年までにはオズボーンはクラプトン（Clapton）駅のポーター長になるために職を変え，ウォルサムストウ自由主義協会（Walthamstow Liberal Association）の会員になっていたといい，オズボーンの初期の一貫しない労働組合や政治団体への加盟は，1903年から1913年のあいだの労働組合と政治的訴訟の一貫性と著しい対照をなしているという（Bagwell, *op. cit.*, p. 241）。ペリングはオズボーン訴訟のとき，オズボーンはノース・ロンドンのクラプトン（Clapton）駅のポーター長であり，ヒューストン教授がサウス・ロンドンのクラッパム（Clapham）駅としている誤りを指摘している（Pelling, *op. cit.*, p.889, R.V. Heuston, *Lives of the lord chancellors 1885-1940,* Oxford, 1964, p.163）。ヒューストンはまた，オズボーンをLiberalではなくConservativeであったとも誤解している（Pelling, *ibid.*）。

（15） Bagwell, *op. cit.*, pp. 199-208 ; Klarman, D. Phil. thesis, *op. cit.*, pp. 49-50.

（16） Walthamstow branch, MS minute book, February 19, 1903.

はL.R.C.のなかの社会主義者の策動と理解された。1903年2月19日のウォルサムストウ支部執行委員会議事録には，「ベル氏にたいする攻撃」と小見出しがつけられ，「われわれはベル氏にたいする変わらぬ信頼を確認し，かれにたいしてなされているミゼラブルな攻撃にたいし抗議する手紙をベル氏に送ることが同意された[16]」と書かれている。ウォルサムストウ支部はベルを支持したのである。

3 「議会代表基金」の徴収

オズボーンとウォルサムストウ支部長たちは，1899-1900年の時期にはまだA.S.R.S.の代表を国会に送るという政策を支持していた[17]。A.S.R.S.がL.R.C.に加盟を決めた1900年3月にも，オズボーンたちが加盟に反対だったことを示す兆候はない。この時期はA.S.R.S.はL.R.C.への加盟費を組合基金から支払っていたが，その額は小さく，特別に寄金を徴収してはいなかった。ところが，A.S.R.S.執行委員会は1901年12月，「議会代表基金」(Parliamentary Representation Fund) として年間1シリングを組合員に課することを提案し，組合員の投票にかけることを決めた[18]。これはA.S.R.S.がL.R.C.に政治寄金をあたえることを意味した。翌1902年初めにおこなわれた投票の結果は，29%と低い投票率ではあったが，投票数の85%が提案に賛成している[19]。その選挙結果をうけて，A.S.R.S.執行委員会準委員会（執行委員5人から成る）は，年1シリングの自発的寄金とそれによる当選議員への年間300ポンドの給与支払いを立案した。執行委員会はこれを承認し，同年のA.S.R.S.年次大会に提案したが，大会では時間切れとなり採決されなかった。その後，再度準委員会が検討し，二点を修正したのち，ロンドンのホルボーン・タウン・ホールで開かれた1903年1月6日の臨時大会に提案された。二つの修正点は重要である。第一は，寄金は自発的 (voluntary) ではなく強制的 (obligatory) なものとすること，各議員は年250ポンド支払われること，選挙区にくるときは3等往復旅費が支給されることであり，第二は，A.S.R.S.の候補者はその選挙区の労働組合評議会 (Trades Council) および，L.R.C.の承認を得ること，である。臨時大会では，全員がこれに賛成し可決した[20]。こうして規約の変更にとりかかり，7月1日から実施された。A.S.R.S.の組合員はこの時以降，政治的信条にかかわりなく，年1シリングをL.R.C.候補者ないし議員に支払うことを義務づけられたのである[21]。しかし，この徴収は組合内部からさまざまな批判がなされたため，事実上凍結せざるをえなくなる。その直接の契機は，ウォルサムストウの地方選挙をめぐってであった。

注 (17) Bagwell, *op. cit.*, p.201.

(18) A.S.R.S. Executive Committee, Rs. 22 and 23, December 1901, quoted in Bagwell, *op. cit.*, p.241.

(19) A.S.R.S. Executive Committee, June 1905 (MSS. 127/AS/OC/1/1/33), quoted in Klarman, D. Phil. thesis, *op. cit.*, p.51.

III. 地方選挙（ホームズ問題）をめぐるオズボーンの反ソーシャリズム

1903年は年がすすむと，オズボーンとウォルサムストウ支部の反社会主義の主張はしだいに鮮明になっていった。その契機となったのは，地方選挙における社会主義者A.E.ホームズ（A.E. Holmes）の支持をめぐってである。この対立はやがてA.S.R.S.内部の支部対本部の決定的対立にまでいき，オズボーン（ウォルサムストウ支部）が本部を訴えるにいたるのである。

しかし，この組合内部で支部が本部を法的に訴えるという構図はオズボーンが初めてではなく，タフ・ヴェイル訴訟の過程で生じた先例があった。タフ・ヴェイル鉄道会社がA.S.R.S.にたいし，1900年8月のストライキがもたらした損害賠償として，約2万4千ポンドを請求したのは，1901年12月24日であった。ウェールズの地域オルグ書記のジェームズ・ホームズ（James Holmes）（本稿でのA.E.ホームズとは別人）を分離裁判にすべきか否かをめぐって，A.S.R.S.内部で議論がつづいた。ホームズは，社会主義者で南ウェールズのタフ・ヴェイル鉄道の闘争を指導した人物であるが，渋々ストライキを承認したA.S.R.S.本部の総書記ベルは，ホームズの裁判を分離し，裁判費用も組合基金から支出したくなかった。しかし，1902年3月13日，A.S.R.S.本部執行委員会がベルの分離裁判の方針を否決し，A.S.R.S.全体がホームズを弁護していくことを決定すると，A.S.R.S.リヴァプール支部が本部を告訴する事態となった。アルフィン対ヒューレット訴訟といわれるこの組合内部の訴訟は，自由主義を支持する支部が，社会主義を支持した本部を訴えたものであった。6月になると，ポンティプール，ウィガン，アバデーア支部がリヴァプール支部に同調した。ベルは，個人としてはリヴァプール支部に賛成するが，総書記としてはそこから訴えられる，という奇妙な立場におかれた。ここに個別労働組合の支部が本部を法廷に訴えるという，イギリス労働史上最初の事例が生じた。これがオズボーン判決の先例である。自由主義を支持する組合支部が，社会主義の路線をとる組合本部を提訴するという構図である。[22]

1903年2月には，まだオズボーンとL.R.C.の関係は比較的良好だった。2月6日，オズボーンは支部の組合員とともにウォルサムストウの労働派候補の選出を考えるL.R.C.地区会議に参

注（20） Bagwell, *op. cit.*, pp. 242-43.

（21） *Ibid.*, p.243. 強制徴収にたいする最初の反対はWhitby支部からなされ，全員投票にかけるべきだと主張されたが，執行委員会はこれを無視した。

（22） この点は，松村高夫「タフ・ヴェイル判決とイギリス鉄道労働運動（V）」，『三田学会雑誌』83巻1号，1990年4月号を参照されたい。

（23） Walthamstow branch, MS minute book, February 6, 1903.

（24） *Ibid.*, February 19, 1903.

加している[23]。つづく同月20日の同じ会議が開催される前日のウォルサムストウ支部の議事録には，「ウォルサムストウ地区の労働派候補の選出について労働組合の会議の結果をオズボーンが報告し，われわれの代表は労働派候補としてホームズの選出を支持することに同意した[24]」と記されている。これはA.S.R.S.の全国機関紙『レイルウェイ・レビュウ』*Railway Review* には1週間後に，「ウォルサムストウ支部－2月19日の会議で，地方労働代表委員会の代表が，報告した。議会の候補者として，L.R.C.のホームズ氏の選出を支持することに同意した[25]」と報じられている。さらに3月5日には，オズボーンが，2月6日と20日に開かれたL.R.C.地区会議について報告し，組合員の同意を得て，2ポンドの寄金をだすことさえ決めている[26]。しかし，その後，事態は急変した。

3月19日，ウォルサムストウ支部執行委員会は，完全にL.R.C.に背を向けることを決める。同支部議事録には，「ホームズ氏を候補とすることにかんして，長い討議がおこなわれ，われわれの代表は急進党（Radical Party）と協調すべく行動するよう指示された[27]。」と記されている。ここでいう急進党とは，進歩党（Progressive Party）のことであり，『レイルウェイ・レビュウ』では進歩党と書かれている。こうしてウォルサムストウ支部は，4月3日以降，ホームズ委員会に支部から代表を派遣することを止めた。4月16日支部議事録は，「われわれの代表はつぎの支部会議が開かれるまで，労働代表委員会のいかなる会議にも参加しない」と記している。その理由は，翌日発表される『レイルウェイ・レビュウ』紙上の記事を「支部組合員が十分考慮することを可能にするため」とされた。その記事にはなにかが書かれていたのだろうか。

1903年4月17日，同紙は，「イースタン・エコー」という見出しのつぎのような記事を載せた。「進歩的勢力を襲っている諸困難のいくつかは，ウォルサムストウで典型的にみられる。……かれらは，その地区の他の労働組合員たちと共同して植字工組合オルグ書記ホームズ氏という労働派候補者をたてているが，一方で自由派陣営から指名されたーあるいは，そうだといわれているー他の紳士が候補者にいる。ホームズ氏についていわれていることが，半分本当だとしても，かれを支持することは無駄骨をおることになろう。かれらがいうには，かれは以前の地方自治体選挙のときに地方労働派候補者たちに反対し，それは効果を及ぼし労働派勢力内部の分裂をもたらした。地方自治体選挙のとき労働派候補者たちに反対したひとがいたことは明らかである……前回の国会議員選挙で，かれ（ホームズ）は労働組合員にたいして，T.U.C.書記のサム・ウッズ

注（25） *Railway Review,* February 27, 1903.
（26） Walthamstow branch, MS minute book, March 5, 1903.
（27） *Ibid.*, March 19, 1903.
（28） *Ibid.*, April 16, 1903. 同じことは，「4月16日，ウォルサムストウ支部　不利益な記事が調査されるまで，われわれの代表は地方労働代表委員会のいかなる会合にも今後参加しない」（*Railway Review.* April 24, 1903）と報じられている。

(Sam Woods) よりも，むしろ資本家－醸造業者だとわたしは思うが－であるモルガンに投票するように薦めた。個人的にはわたしはホームズにかんする噂のいくつかは信じないし，かれも否定するだろう。……ウォルサムストウに忠告するとすれば，しばらく静観するべきである，ということである。静観すれば事の全体がみえるものである。[29]」署名は「イースト・アングリア」とあり，それが誰であるかは特定できないが，この記事が，候補者ホームズに過去の選挙で，進歩党の候補者に反対したり，資本家を支持したりしたという疑惑があるとして，「静観する」ことをすすめたものであることは明らかだった。

4月29日の『レイルウェイ・レビュー』には，反論が載った。その反論は，A.S.R.S.ウォルサムストウ支部も参加した会議で，ホームズを正式な候補者とすることが決定されたことを指摘したあとで，つぎのように述べている。「3月に開かれた労働組合員の大衆集会では，ホームズが候補者となることをまったく反対なしに決定した。反対の兆候はなかった。しかし，その事実が知れ渡ると，自由党は自由主義者と自認する労働組合員たちを利用して足をひっぱりはじめた。わたしは明確にいうが，ホームズにかんして「イースト・アングリア」が公表した話は，本当ではない。[30]」反論によれば，これは自由党による妨害であるというわけである。

「イースト・アングリア」なる署名の4月17日付記事を，ウォルサムストウ支部は利用して，社会主義者ホームズ不支持の理由とした。ここには自由主義支持，反社会主義の支部の方針が表明されている。同支部は，4月30日，ホームズ委員会宛に，『レイルウェイ・レビュー』の当該記事の切り抜きを同封し，事実を解明するよう求める決議をした。[31] オズボーンはホームズ委員会宛5月5日付けの書簡で，激しい調子でつぎのように書いている。「……もしも先の非難が正しいならば，ホームズ氏を候補者にすることは砂地を掘るようなものであり，労働運動を売るような利己主義と自己宣伝が主内容をなすかれの悲しむべき人格，不名誉なごろつき（a diahonourable vagabond）を推すならば，全く時間と金の浪費である。[32]」5月17日にホームズ委員会の書記ベイリー（W.E.Bailey）から返事がとどいた。ベイリーは，「あなたがた組合員すべての心から，A.E.ホームズ氏が正真正銘の候補者であることについて，疑惑をすべてぬぐいさることができることを望んでいる。[33]」と書き，ホームズ自身を含む3人を支部に派遣して説明するとしてあった。5月23日にホームズたちがウォルサムストウ支部にやってきた。だが，結果は否定的であった。

注 (29) 'Eastern Echoes' by 'East Anglia', in *Railway Review*. April 17, 1903.

(30) *Railway Review*. April 29, 1903.

(31) Walthamstow branch, MS minute book, April 30, 1903. 返信は5月14日にもまだ届いていない（*ibid.*, May 14, 1903)。

(32) Letter from Osborne to Holmes Committee, May 5, 1903, MS. (MSS. 127/AS/OC/1/1/1)

(33) Letter from W.E. Bailey, secretary of Holmes Committee, to Osborne, May 17, 1903, MS. (MSS. 127/AS/OC/1/1/1)

6月11日，ウォルサムストウ支部は重要な決議をする。ホームズ氏は，「労働組合主義の装いのもとで行動する社会主義候補者にすぎないことを確認する」と述べたあと，「われわれが支持することのできる唯一の労働派候補者は，すべての政党（社会主義者を含む）から独立し，すべての進歩派同志とすすんで共同しなければならない。ホームズ氏は，ウォルサムストウの進歩党に長いあいだ反対してきたことにより，同地区の労働派候補者として絶対に受け入れられないように，自らがしてきたのである。われわれはそれ故，当支部の名前をホームズ支持者のリストからはずすよう要請する[34]。ここに至って，ホームズは社会主義者であるがゆえに支持できないという態度を，明確に決議として表明した。そして，「ウォルサムストウ支部の組合員は，ここにウォルサムストウのホームズ候補にたいし，L.R.C.のいかなる資金も提供されることに抗議する」と決議したのである。この支部決議は，ホームズや『レイルウェイ・レビュウ』だけでなく，『ウォルサムストウ・レコーダー』*Walthamstow Recorder*，『デイリー・ニューズ』*Daily News*，『モーニング・リーダー』*Morning Leader* にも送付された。

オズボーンは，『レイルウェイ・レビュウ』（1903年6月19日）宛に書簡を送り，つぎのように書いた。「人間としてホームズ氏にたいし，わたしは反対しないが，政治家としてはかれは不可能である。かれとかれの政党（社会主義者たち）は，進歩党選挙委員会の推薦した人に絶えず反対してきた。その委員会は，圧倒的に労働問題に関心のある人々から成っており，大部分は労働組合員である。……かれ（ホームズ）は勝つ可能性はない。3万人の選挙人がいるのにたいし，社会主義者と労働組合員の合計は4千人をこえていない。さまざまな理由から，投票にいくのはその半分以下であろう。ホームズを支持するのは，またその半分以下であろう。名目的にかれを支持している組合は，内部がひどく分裂している。……ホームズは労働派の候補者ではなく，社会主義の候補者である。……ホームズは労働組合の装いのもとで立っている。かれの黒幕は有名な社会主義者たちであり，社会主義者でない労働組合の代表者たちは，口実に使われているにすぎない[35]。」

1903年末まで，ホームズは候補者だった。オズボーンのホームズ批判は翌年1904年もつづけられ，決着がついたのは1905年になってからであった。1905年5月，オズボーンは，ウォルサムストウの自由党候補者，ジョン・サイモン（John Simon）を承認した。同時に，ホームズ反対の投書戦術にでて，ラムゼイ・マクドナルド（Ramsay MacDonald）やジェイムス・マクドナルド（James MacDonald）に書簡をおくった。1905年末，ホームズ立候補問題は，ホームズの立候補辞退によりようやく決着がついた。辞退の理由は，植字工組合が他の候補者への資金援助で手一

注（34） Walthamstow branch, MS minute book, June 11, 1903.
（35） Letter from Osborne to Railway Review, June 19, 1903.
（36） Klarman, D.Phil thesis, *op. cit.*, p. 66.
（37） *Walthamstow Guardian*, August 26, 1910, quoted in Klarman, *ibid.*, p.58.

杯になってしまったことによる資金不足とかれの病気であった。[36] オズボーンは後に回顧してウォルサムストウにおけるホームズの議会への立候補が，政治寄金の「すべてのトラブル」の起源であると書いている。[37]

IV. オズボーンとA.S.R.S.本部との対立の深化－訴訟への過程

1 R. ベル問題再燃

A.S.R.S.の総書記R.ベルが，1904年1月のノリッジの補欠選挙でL.R.C.候補者を推薦することを拒否し，当選した自由党候補者に祝電を送ったとき，L.R.C.は再度これを問題とせざるをえなくなった。同年2月の年次大会でベルを批判し，今後ベルを候補者にしないという意見もだされたが，すべてはA.S.R.S.執行委員会と協議してからということになった。L.R.C.代表としてマクドナルドとシャクルトン（Shackleton）が，3月17日にA.S.R.S.の執行委員と会見した。ベルにL.R.C.の選挙規約改定に署名するよう迫ったが，ベルは署名を拒否し，A.S.R.S.の議会代表を辞任した。しかし執行委員の何人かは，ベルの自由党との連携に賛同していた。A.S.R.S.の多数の支部も，ベルを支持していたが，ウォルサムストウ支部はその1つであった。[38] 同支部は，A.S.R.S.がL.R.C.に加盟していることについて，再度，組合員の全員投票にかけるべきだと提案した。ウォルサムストウ支部は3月31日，つぎのような決議をしている。

「当ウォルサムストウ支部のこの会議は，（A.S.R.S.の）執行委員会がベル氏の賢明なる政策にかんしてとった法外な行動を憤りと警戒をもって検討し，次回の会議でかような嘆かわしい決定を破棄すること，ただちにL.R.C.にひきつづき加盟することの適否について組合の全体投票にかけること，さらにベル氏にたいしかれが労働者にかわって議会の内外で偉大な奉仕をしていることにたいするわれわれの心底からの感謝の意を伝えること，そしてベル氏がL.R.C.の専制（the tyranny of the L.R.C.）と闘いつづけると信頼することを執行委員会に要求する。[39]」

そして，ベルの問題が決着をみるまでは，同支部では議会基金の徴収を中止することも決定した。このウォルサムストウ支部の決定は，A.S.R.S.の空気を一定程度反映しており，組合には

注（38） Walthamstow branch, MS minute book, February 18, 1904.

（39） *Ibid.*, March 31, 1904. この決議は，Walter V. Osborne, *My Case,* 1910. に転載されている（pp. 15-16）が，オズボーンはそれを転載する前文でつぎのように書いている。「諸々の組合のなかでは内部闘争が吹き荒れていたが，一般の人々にはほとんど知られていなかった。なかでもA.S.R.S.ほど激しいところは他になかった。そのウォルサムストウ支部は，わたしが書記をしていたのだが，常に先頭にたっていた。当支部はある人への支持を曲げず，1904年3月，つぎのような決定をした。」（*ibid.*, p.15）

（40） A.S.R.S., Executive Committee, June 19, 1904, quoted in Klarman, D. Phil. thesis, *op. cit.*, p.56.

分裂の危機が迫っていたことは明らかだった。A.S.R.S.の84支部が，ベルとL.R.C.との関係を検討する臨時大会の開催を要求し，53支部がL.R.C.への加盟をつづけるか否かを全員投票にかけることを提案している[40]。しかし，執行委員会はこれを拒否した。

1904年10月のブラッドフォードにおけるA.S.R.S.年次大会では，ベルはL.R.C.の規約に署名しないまま，ひきつづきA.S.R.S.の議会代表であることを認める決定をした。30対29という小差であった。A.S.R.S.内のリベラル派がこの時期巻き返し，勢力は拮抗していたことが読みとれる。また，「A.S.R.S.から立つ候補者は，労働組合評議会（Trades Council）とL.R.C.の承認を得なければならない」とする従来の規定（8条4項）を変更し，「全ての候補者は最終的に組合員の投票により選出される」とした。L.R.C.支持者でなくてもよいとしたのである。リベラル派の一時的勝利であった[41]。

2 「議会代表基金」徴収にたいする反対

にもかかわらず，1905年までにA.S.R.S.執行委員会は3人の社会主義者，ハドソン（Hudson），ウォードル（Wardle），ホームズ（Holmes）をA.S.R.S.からの立候補者として立てた。もちろんベルは含まれていなかった。これらの選挙費用は組合の議会基金からだされたので，リベラル支持の諸支部からは再度反発が生じた。じじつ，1905年2月にはA.S.R.S.の組合員1万2千名が寄金の支払を拒否した[42]。オズボーンは，1905年3月3日のベル宛の書簡で，つぎのように書いて抗議している。「議会基金にかんして――われわれウォルサムストウ支部の組合員は，議会基金問題を再考した結果，社会主義に寄金する意志を労働組合の試金石にしかねない政策にたいし，最も強く抗議の意志を表明する。さらに，寄金を集めることを中止するよう書記に命じた。1904年3月の議事録を確認することを決議した[43]。」1904年3月31日の議事録とは，「ベル氏の政策にかんする紛争が十分に解決されるまでは，議会基金を集めないよう書記に指示すること[44]」というものであった。

オズボーンは，1905年3月3日に，A.S.R.S.執行委員会に宛ててもつぎのような4枚の長文の書簡を送っている。そこには，A.S.R.S.本部との徹底的な対決姿勢と法廷に訴える覚悟が示されている。

「……それ故，われわれの立場は極めて明瞭である。われわれは基金を払わないということで

注（41） Bagwell, *op. cit.*, pp. 243-44. バグウェルは，「1904年10月，ブラッドフォードでは反社会主義者たちは一時的勝利を達成した」と書いている（*ibid.*, p.243）。

（42） *Reynolds' Newspaper,* February 5, 1905, quoted in Klarman, D. Phil, thesis, *op. cit.*, p.57.

（43） Letter from Osborne to Bell, MS, March 3, 1905," Re L.R.C. Affiliation", MS(4pp.)(MSS. 127/AS/OC/3/13/4)

（44） Walthamstow branch, MS minute book, March 31, 1904.

ある。つぎの行動は，あなたがたしだいである。擁護できない立場をとりさげるつもりなのか。それとも，われわれの支部を潰すという立場をとりつづけるのか。そうなれば，ただちに法廷に地位回復を求めて，訴訟がおこされるだろう。しかし，あなたがたがこの行動をとるまえに，われわれは，あなたがたがA.S.R.S.にたいし，外部の団体と同じように義務はないのかどうか，立ち止まって考えるよう求めたい。社会主義に束縛されたくないので基金を払いたくないという理由だけで，本当にあなたがたは数千人の善良な組合員を組合から追いたてたいのだろうか。あなたがたは，すでに組合を麻痺させていることに気付かないのだろうか。正直な組合員が自分自身組合から追い出されるのは時間の問題であることを知っているのに，どうして他のひとに組合加入を勧めることができようか。この不安定さは，組合活動にとって極めて有害である。あなたがたの立場は不道徳であるだけでなく，非論理的であり，非合法的である。[45]」

3 「議会代表基金」徴収の合法性の検討

このような事態に直面して，A.S.R.S.の執行委員会は，1903年7月から実施していた政治寄金の徴収が合法的であるかどうかを検討せざるをえなくなった。[46] この点をオズボーンは，後年，「1905年3月，この支部（ウォルサムストウ支部）は他に矯正手段が採られないならば，法廷に訴えることを決定した。この直接的問題でわれわれは執行委員会に挑戦したが，委員会は法的論点をロバート・リード卿（現在はローバーン卿）とエドワード・クラーク卿に検討を委ねることに同意した。[47]」と書いている。

A.S.R.S.委員会は，二人の弁護士に組合基金からの政治的支出は合法的であるか否かの見解を問うた。E.クラーク（Eduard Clarke）とR.T.リード（R.T.Reid）は，1905年5月31日に「見解」を公表した。それは，議会代表のための強制的寄金は年次大会の議を経ていないので，また，規約19条による正当な手続きを経ていないので，有効ではない。したがって，現在は強制的に寄金をあつめることはできない。だが，組合は「組合員の状態を改良し，利益を保護する」という目的のためにならば，寄金を強制することができる，というものだった。それは具体的にはつぎの5点であった。

「 1）規約に正当にもとづく年次総大会は，強制的寄金を組合員に課することができる。

2）議会の代表選出が，組合員の「状態を改良し，利益を保護する」ことのひとつであるならば，われわれはそうだと考えるのだが，その結果は議会の候補者や議員が労働組合員であろ

注（45） Letter from Osborne to Executive Committee of A.S.R.S., Marrch 3, 1905, MS. (MSS. 127/AS/OC/3/13/3)

（46） A.S.R.S., Executive Committee, March 1905.

（47） W.V. Osborne, *My Case*, *op. cit.*, p. 16.

うとなかろうと，またかれらが支持する組織が労働組合員から構成されようと他の人々から構成されようと到達されるだろう。

3）正当につくられた規約によらない特別の寄金は強制することができない。しかしこの条件のもとで，われわれの見解では，執行委員会の組合のしごとを遂行するさいに大きな自由裁量権をもつ。寄金が組合員の状態を改良し利益を擁護するといいうる目的に合うかどうかが，事実として試金石となる。もしその目的が一国全体の利益になるとしても，それでは十分ではないだろう。かれらの見解や利益を代表する特別に資格のある特別に委託された議員の存在を確保するというように，組合員の特別の利益になるような目的がなければならない。

4）（現行の）規約によりこの種の特別の寄金にたいし投票によって組合員の承認を得ることができるとわれわれは理解することはできない。特別の寄金を課すこととその目的を明記した規約をまず最初に通し，有効なものとしなければならない。それがなされたとき，執行委員会は規約にしたがって寄金の申請をしなければならない。寄金をしない者に罰則を課すならば，規約にその旨特記しなければならないが，そうすれば強制することができるだろう。全員投票を求めることに慎重であるべきなのか，奨励すべきなのかという問題，すなわち政策の問題はわれわれの関知するところではない。

5）現在の規約では，通常の寄金をしている組合員が，議会基金を支払わなくとも，執行委員会もしくは年次総会で規約による給付を奪われたり組合を除名されたりする処罰を受けることは，いかなるばあいでもありえない。

6）正式につくられる新しい規約は，この効果を強制的なものにしうる。

1905年5月31日

（署名）エドワード・クラーク

R.T.リード

[48]」

4 「議会代表基金」徴収の最終的決定

このような2人の弁護士の「見解」にもとづいて，一人4半期（3ヵ月）3ペンスを労働派代表のために議会基金として払うことを組合規則に書き入れることの是否を，組合員全員の投票にかけた。投票総数は2万6762票，組合員のほぼ半数であり，うち81％が賛成票であった。反対は18％で4,825票であった[49]。この結果は，執行委員会にとっては，1902年の投票に比べて大いに確

注（48） 'Opinion' signed by Edward Clarke and R. T.Reid, (typescript 3pp.)(MSS. 127/AS/OC/3/4/127)

（49） A.S.R.S. Executive Committee, September 1905, quoted in Bagwell, *op.cit.*, p.245.

信をあたえるものだった。この結果は，A.S.R.S.の大会で承認される必要があった。

1905年10月のシェフィールドでのA.S.R.S.の大会では，原案は「当大会は最近の投票の結果をみとめ，規則に書かれている労働派代表のために4分の1期3ペンスの寄金の原則に同意する」であったが，この原案は55対1で可決された。[50] こうして労働派代表のための議会基金が正式に認められることになった。

オズボーンは，この大会に代議員として出席していた。オズボーンはつぎのように書いている。「わたしの支部の要請によりわたしは大会の候補者に立候補し，東部諸州の様々な支部でわたしの見解を明瞭にのべたところ，わたしが1905年9月に規約再採択に反対するために選出された。／社会主義者の組織は大変強力だったので，その規約は多数で採決された。／いまや本件は法廷に持ち込まれなければならないことが明らかになった。何らかの地位を得るために，わたしはウォルサムストウ市議会の候補者になり，1906年4月に当選した。[51]」

大会でもちろんオズボーンは原案に反対し，「執行委員会の推薦にもとづき必要ならば，現在の組合費のなかから支払うべきである」との修正案を支持したが，修正案は結局55対3で否決された。オズボーンがこの採決に不満の意を表明したのは，当然である。かれはただちにベル宛に抗議の書簡を送った。オズボーンの見解によれば，全員投票の結果は，2万1713人だけが賛成し，残り2万8166人は投票しなかった。これは無関心によるものではなく，議会代表には全て反対するのか，それともL.R.C.だけに賛成するのかという，「特異な惑わすやり方による。」しかも，「この決定はたんに寄金の原則を認めただけで，いかなる意味でも規約ではない。」「13条4項は，年次総会で提案されもしないし，通過もしていないので，登録することはできない。」ということになる。[52] そして，組合規約改正として登録されることに抗議すると宣言し，じっさいに友愛組合登録所に規約改正の異議を申したてたが，これは結局認められず，そのまま規約として効力を発揮することになった。

5　A.S.R.S.内部の対立の激化

1906年1月の総選挙は，自由党が400議席を獲得し保守党（157議席）にかわって政権を担当することになった。L.R.C.も29議席を確保し，成立後5年たらずで相当数の議会進出を果たし，

注（50）A.S.R.S., Decision of the AGM, October 1905, R.66, quoted in Bagwell, *op. cit.*, p.245.

（51）W.V. Osborne, *My Case*, *op. cit.*, p.18.

（52）Letter from Osborne to Bell, October 12, 1905, MS.（MSS. 127/AS/OC/3/13/6, AS/OC/3/4/19/i）オズボーンの解釈では，二人の弁護士の「見解」も自らの主張を裏付けることになる。「上に示されたものから弁護士たちは，かような支払いが合法的であったとしても，それは組合の目的のためでなければならないと明確に指示していることがわかるだろう。しかし労働党は，明白にその政策は全国的な政策であることを認めている。」（*My Case*, *op. cit.*, pp. 17-18）

名称を労働党に変えた。この成果は1903年に自由党とL.R.C.とのあいだでなされた投票の秘密協定が効果を発揮したものであった。その協定はある選挙区のなかで自由党とL.R.C.の双方からの候補者を1人にしぼり，その候補者に投票を集中することにより保守党候補者を落選させるとするものだった。その結果成立した自由党政権は，したがって労働者階級の利害をも一定程度は政策に反映させざるをえず，一連のリベラル・リフォームと呼ばれる社会政策がなされることになる。

1906年の選挙結果は，A.S.R.S.執行委員たちにも自信をあたえた。A.S.R.S.が立てた3人の社会主義者のうち2人が当選した。リチャード・ベルは今回は自由党から立候補し当選している。同年6月，A.S.R.S.執行委員会は組合規約に「すべての候補者は労働党の諸条件に署名し，受容し，院内幹事に従わなければならない」と付加することを年次総会で決定（規約13条の変更）することを決めた。[53] 同年10月のA.S.R.S.の年次大会で，R.ベルは，「規約を改定する年ではない，規約変更は3年毎であると決められている，緊急必要事項はもちろん執行委員会が推薦すれば大会で決められるが，規約13条はすでにカーディフ大会で緊急事項ではないとされていた。」と主張したが，ベルの主張は無視され，40対2で原案が可決された。[54] 前年の反社会主義者の一時的勝利は消え去っており，圧倒的多数が労働党支持であった。

しかし，ベルを支持する支部はその決定を承服できないとした。たとえば，グディック（Goodwick）支部は，1906年11月1日付けでベル宛につぎのような支部決定を送っている。「……われわれ組合員の大多数はわれわれの組合を社会主義に引き渡すことに反対であると信じるので，ベル氏がL.R.C.の規約に署名するべきか否か，かれが，L.R.C.を辞めるか否かについて，組合員全員の投票にかけるようわれわれは要求する。[55]」同じ頃，A.S.R.S.の南部地区評議会，ウォルソール（Walsall）支部，パース（Perth）支部が同じ趣旨の決議をしてベル宛に送っている。[56]

ウォルサムストウ支部と『レイルウェイ・レビュウ』編集長の社会主義者G.ウォードルとのあいだの対立も激しくなり，かれがストックポートから立候補することにも反対する声明をだした。こうして，ついにウォルサムストウ支部は，A.S.R.S.の労働党への寄金にたいして，禁止命令を得るべく法廷に訴えることを模索しはじめた。1906年3月のウォルサムストウの地方議会の選挙でオズボーンは進歩党から立候補し当選するが，その進歩党の議員にウィルキンソン（T.Wil-

注（53） Bagwell, *op. cit.*, p.246.

（54） *Ibid.*, p.246.

（55） Letter from William Phillips, secretary of Goodwick branch, A.S.R.S. to R. Bell, November 1, 1906, MS.（MSS. 127/AS/OC/3/10/123）

（56） Letter from W. Brett, secretary of Southern District Council, A.S.R.S., to R.Bell,（September 30, 1906）, MS.（MSS. 127/AS/OC/3/10/3）; Letter from Walsall branch to R. Bell,. Octber 8, 1906, MS.（OC/3/10/14）; Letter from Perth branch to R. Bell, October 8, 1906, MS.（OC/3/10/15）

kinson）という弁護士がおり，かれがオズボーンに訴訟の方法を教示したのである。

一方，1906年8月7日，労働党は書記ラムゼイ・マクドナルドの名前で一人当たりの議会基金を倍額にする声明をだした。すなわち，「前回のわれわれの大会で通った決定にしたがって，執行委員会は最近の選挙権における目ざましい成功がもたらした負荷との関係で，議会基金の現状を考察した。／ご承知のように，議会基金から給付を受ける資格のあるわれわれの各議員は，年間200ポンド支払われる。29人の議員がいまその地位にあるので，基金の総額は年間5800ポンドとなる。」そして事務員の給与（100ポンド）などを含めると6290ポンドになるが，「われわれの収入は昨年じっさいには4000ポンドであり，支払いの増加が必要であることは明らかである／もし支払いを1シリングから2シリングに上げたならば，収入はわれわれの現在の会員数から計算して約8000ポンドになる。」それは予定額を少し上回るけれども，将来の労働党の議員の増加を期待すれば，それは少額である。執行委員会はそれ故つぎの大会で議会基金を一人年間2シリングに上げ，それを1907年—8年の初めから実施したいと通告し，さらにそれらのことを大会の代議員にあらかじめ説得してくれるよう依頼している。[57] A.S.R.S.は，このように労働党からは議会基金の増額を期待されている一方で，組合内部の支部からは基金の廃止を求められ，その双方の圧力をうけ板挟みになっていたのである。

6　オズボーンの『デイリー・エクスプレス』への訴え

1906年1月の総選挙で明らかになった労働党の進出に，資本家が危機感をもったのはいわば当然である。『デイリー・エクスプレス』*Daily Express* は当初，労働党の進出に好意的であったが，9月以降，「社会主義者の破滅的な教義（pernicious doctrines of the Socialists）」に反対するキャンペーンをはじめた。「正直な労働組合員（honest trade unionists）」は保護していくというのである。この新聞は，アーサー・ピーソン卿（Sir Arthur Peasont）というトーリーの所有になるものである。その背後には，グレイト・セントラル鉄道会長のアレクサンダー・ヘンダーソン（Alexander Henderson）がいた。かれは鉄道会社の合併を試み，労働組合潰しをつづけてきた人物であるが，『デイリー・エクスプレス』と財政的に深く関係していた。1カ月以上も「社会主義の欺瞞（the fraud of Socialism）」の記事が一面を飾った。オズボーンは『デイリー・エクスプレス』編集者宛に訴訟にかかる費用をもとめる書簡を投函した。9月17日付の同紙には，つぎのようなオズボーンの書簡が載った。

「数千の労働者が貴紙のタイムリーな社会主義者の欺瞞の暴露にたいして貴紙に感謝している。……

注（57）A leaflet (1p.) from J. Ramsay MacDonald, M. P., secretary of the Labour Party, August 7, 1904.（MSS. 127/AS/OC/3/11/15）

社会主義者が労働組合を握り，他の政治家たちがするようにそれをかれらの目的のために使うのはまさに不道徳である。……

A.S.R.S.の組合員はすでに，もし社会主義者の候補者以外を支持したならば，苦痛と処罰で脅かされる……

労働組合は賃金を規制する。一方，社会主義は賃金を廃止する。

労働組合は雇用者と友好的な会談を持とうとしても，もし組合が社会主義者に支配されていたならば，それは全く不可能になる。社会主義者は雇用者にたいして無差別に汚らしい悪罵を投げつけるのである。

A.S.R.S.の孤児基金は88,000ポンドの収支決算である。これもまた，社会主義者に握られてきており，社会主義の寄金をよせた者の孤児だけに排他的に使われている。多くの部分が寛大な一般組合員による寄金であるにもかかわらず，将来おそらく，社会主義者候補の奨励のために使われるだろう。……

A.S.R.S.は寄金を強制しているが，これを承認する年次総会の議事録を提出することができない。エドワード・クラーク卿とロバート・リード卿（ローバーン卿）は，寄金はそれを集めた組合の特別な利益になるよう使われたときにのみ合法的であるとしている。

わたしの支部の組合員は首尾一貫して寄金と闘ってきたし，それを払ったこともない。

わたしの支部はひとつの支部として（私自身は個人として），もしその寄金が個人または一般組合員の資金だけから得られるならば，A.S.R.S.を裁判に訴えるだろう。

A.S.R.S.にたいする訴訟は全体の体系にたいする訴訟になるだろう。

W.V.オズボーン（市議）

A.S.R.S.ウォルサムストウ支部書記

[58]
」

オズボーンの訴えは9月21日と27日にも掲載され，9月末までに訴訟のための「十分の資金が集まった」し，翌年までに250ポンドが読者から寄付されたという[59]。こうしてオズボーンは法廷に訴え，1907年に強制的議会基金の合法性をめぐるオスボーン裁判がはじまったのである。（続）

（経済学部教授）

注（58） Letter from W.V. Osborne to the Editor of the "Express", September 16, 1906. (typescript 3pp.)(MSS. 127/AS/OC/3/4/20)

（59） Bagwell, *op. cit.*, p.248.